愛知教育大学附属高等学校研究紀要第 47 号
pp.95～101（March, 2020）

国際交流活動の実践報告

―大学のリソースを活かした取り組み―

校務部　小田原健一、酒井　類、石鍋圭一、宮本真衣

今年度は国際交流活動の新たな取り組みとして、愛知教育大学の留学生の方々との交流を推進してきた。新たな取り組みを模索した要因は昨年度まで実施してきた豪州語学研修が実施できなくなったためだが、この取り組みは大学のリソースを活かした附属高校ならではのものとなった。参加希望者も留学生、高校生とも徐々に増えており、来年度以降も継続・発展させることができれば、本校の特性の一つになり得ると考えている。

本稿では、過去の国際交流活動の概要と併せて、今年度の実践について報告させていただく。

＜キーワード＞　国際交流　ユネスコスクール　高大連携　持続可能性

1. 本校国際交流活動の沿革

筆者（小田原）は本校勤続 10 年である。勤続期間のより長い教員の助言を手がかりに過去の記録を辿り、国際交流活動の沿革をまとめてみた。

(1) 韓国研修旅行

昭和 62（1987）年度より韓国への 3 泊 4 日の海外修学旅行（第 2 学年）を実施してきた。なお、この活動は平成 4（1992）年度まで続き、同じ平成 4 年度から韓国研修旅行（第 1 学年）と名称を変え、同様に 3 泊 4 日で実施することとなった。なお平成 5 年の 3 月には第 1・第 2 学年がほぼ同時に韓国に向かっている。韓国研修旅行は平成 18（2006）年度まで実施されたが（平成 18 年度は 2 年生 5 月に実施）、当時の東アジア情勢の不安定さなどが懸念されたため、平成 19（2007）年度から修学旅行の訪問先は国内（沖縄）に変更することとなった。なお、この当時の記録によると、韓国観光公社主催の韓国修学旅行感想文コンクール／写真コンクールに応募した生徒が金賞など上位入賞を果たしている。

この韓国への訪問期間を通してソウルの韓国建国大学校師範大学附属高等学校（以下、建国大附属高校）との交流が深まり、修学旅行先の変更後は平成 20（2008）年の 12 月に同校と国際交流協定の調印を行った。

(2) 豪州語学研修

国際交流協定に調印したものの、建国大附属高校との交流活動は以前ほど活発なものではなくなっていた。そのような中で、平成 26（2014）年度より、オーストラリアのアイヴァンホー・グラマースクールとの交流活動が始まった。この活動は、夏期休暇中に本校生徒数名が豪州語学研修として相手校の生徒宅にホームステイをし、翌年の 1 月に相手校生徒が本校生徒宅にホームステイをする形式を採った。語学研修に派遣された本校生徒は 9 月の碧海野祭（文化祭）の講堂発表で、研修の成果を全校生徒に紹介し、相手校生徒は本校の授業を受け、年によっては休日に京都へのバス旅行に参加したり、1 月ならではの百人一首大会に参加したりした。この交流活動は滞在費用を抑えられるメリットがあったものの、

平成 30（2018）年度の交流を最後に、相手校の人事異動などの都合もあり継続実施が不可能となってしまった。

図１：百人一首大会に参加する豪州高校生

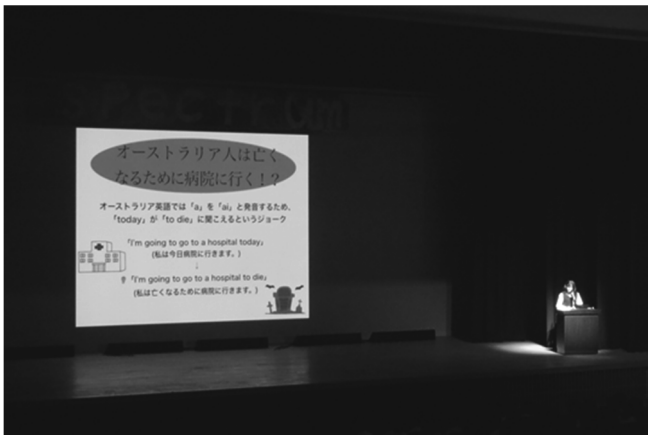

図２：碧海野祭での研修成果発表

（3）その他

本校は建国大附属高校をはじめとした韓国との交流活動や種々のボランティア活動が評価され、平成 26（2014）年にユネスコスクールに認定された。ユネスコスクールには国際理解教育への積極的な活動が求められていることもあり、同年から始まった豪州語学研修に加えて、平成 28（2016）年度より、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と（株）ファーストリテイリング（ユニクロ・ジーユー）とのパートナーシップのもとに取り組む学習活動“届けよう、服のチカラ”プロジェクトに参加し、難民問題に関する出張授業を受け、子ども服の回収活動に取り組むようになった。

2. 国際交流活動の再構築に向けて

昨年の豪州語学研修が無事終了した頃、すでに今年度以降の継続実施は不可能であることが明らかとなっていた。そこで国際交流活動を担当する校務部では、昨年の 2 学期以降、新しい国際交流活動のあり方について検討を開始した。ここで重視したのは持続可能性で、個人の力量や人脈に頼らず、学校全体として国際交流に関われるようにすること、本校の活動を支援してくれる諸機関との連携を深めることについて検討を重ねた。

（1）昨年度の検討事項と準備

新しい国際交流活動の検討は校務部会を中心に行ったが、学校全体として国際交流活動を推進したいという思いから、平成 30 年 1 月のアイヴァンホー・グラマースクール生徒の受け入れ終了後に、新しい国際交流活動への提案を求める等の職員アンケートを行った。

以下はアンケートに記載された先生方の意見である。

〇SNS 等を利用して、相手校の情報をより深く知り、相手校の生徒達と交流する方法もあるのではと思う。

〇Ivanhoe Grammar School 以外の留学先を模索してみてもよいのでは。

〇愛教大に来ている留学生と交流するなど、日本国内での交流活動を推進してみてはどうか？

また、このアンケートに記載された提案以外にもユネスコスクールのネットワークを活用した学校訪問やビデオレター等の交流方法があることを他分掌の先生から紹介してもらうことができた。これらの意見を踏まえ、昨年度末の職員会議では校務部として次のような提案を示した。

＜案１＞

来年度、新しい語学研修先を見つけるのは難しいため国内でできる活動を始める

例１　愛教大留学生との交流を活性化させる

例２「イングリッシュ・キャンプ」

【参考】　Ｋ高校：２５名（５万円弱）旭高原３日間

＜案２＞

再来年度（2020 年度）以降、仲介業者を利用した語学研修の在り方を検討する

※　株式会社 ISA と懇談した結果、以下の様な事が分かりました。

・　１０名以上だと団体予約で飛行機のチケットを申し込むことができ、安くできる。

・　予算の上限に応じて、行き先／期間／プログラムの内容は自由に変えられる。

例）　Ｔ高校：２０名（３４万円程度）オーストラリア１０日間

：現地の学校で英語の授業／学生との交流／ホームステイ（１家庭２名）

・　費用が高いのが課題だが、費用を下げる方法として、何校かが合同で留学のプログラムを組む方法もある。

この提案の中でも愛知教育大学の留学生との交流は、大学のリソースを活かすことのできる本校の特性を活かした活動であり、優先して実現に向けて動くこととした。その際、昨年度の 3 年生の総合的な学習の時間でご助言を頂いていた愛知教育大学外国語教育講座の小塚良孝先生を通じて、愛知教育大学国際交流室長の三浦秀樹氏を紹介してもらうことができた。春期休業中に大学側の小塚先生、三浦氏、高校側の小田原（筆者：校務主任）、石鍋教諭（国際交流担当）の 4 名で打ち合わせを行い、平成 31 年度から留学生と高校生の交流活動を開始する準備を整えることができた。

(2) 今年度の実践に向けた準備

留学生との交流活動を学校全体としてより円滑に推進していくために、4 月初旬から英語科の先生方に助言や協力をお願いした。こうして 4 月下旬の職員会議では校務部・英語科の連名で以下のような提案をし、認められるに至った。

愛知教育大学留学生との交流推進について

１　目的

（１）国際交流活動を持続可能なものにするため、国内での活動を定期的に実施する体制を整える。

（２）附属高校として、高大連携の活動を活性化させる。

２　大学側の担当

小塚良孝准教授（外国語教育講座）、三浦秀樹国際交流室長（学生・国際課）

３　留学生について

愛知教育大学は一般の留学生だけでなく、教員研修留学生（出身国では教員）を受け入れており、教員研修留学生との交流は授業形式を想定している。両者とも出身国はアジア・アフリカが主で、英語でコミュニケーションができる留学生・教員研修留学生との交流を推進する。

４　活動計画

（１）留学生との交流

・平日の授業後、或いは長期休暇を利用した交流活動（英語部、茶道部、書道部など）

（２）教員研修留学生との交流

・学期毎に１回程度、英語での授業を実施。

例　７月２４日（水）午後、１２月１８日（水）授業後、または総合的な学習の時間

＊下校時刻遵守、部活動と３年生補習を妨げ無い場所で活動

５　職員・生徒への通知（省略）

６　その他

（１）部顧問の先生とも連携し、協力を得ながら活動する。

（２）各活動については、毎回職員朝礼などで概要を説明する。

後日（5 月上旬）に生徒向けの説明会を行い、今後、活動日時や内容の詳細が決定する毎に、参加希望者を募る方式を採用することを伝えた。また、高校側では国際交流担当の石鍋教諭が中心となって、大学側との交渉を進め、具体的な活動内容を決定していった。

3. 実践事例

(1) 第 1 回交流会（6 月 12 日（水）の授業後）

13 名の留学生（9 つの国・地域出身）の皆さんに来校して頂き、高校からも英語部、書道部、生徒会、有志の生徒が集まり、書道体験やお互いの国の文化紹介などで交流を深めた。

図３：書道体験の様子

図４：マラウイ共和国の紹介

(2) 第 2 回交流会／ランチオン参加（7 月 24 日（水）／7 月 25 日（木）の夏期補習後）

第 2 回交流会では、出身国で実際に教員として勤めている教員研修留学生の方 2 名を附属高校にお招きし、お互い国の文化や教育について情報交換をした。高校生は英語をメインに、時折日本語を交えて質問をした。また、この翌日には大学の教育交流館で実施される「ランチオン」（留学生との昼食会）に、高校生が他の大学生や留学生と共に参加した。

図５：教員研修留学生との交流

図６：ランチオンの様子

(3) 第 3 回交流会（10 月 30 日（水）の授業後）

9 名の留学生を附属高校へご招待して、茶道の体験活動に参加してもらった。高校の茶道部と英語部の生徒が協力して、英語を交えて作法を説明しながらお茶会を開いた後、留学生の皆さんにもお茶をたてる体験をしてもらった。

図７：お茶会（初体験の留学生も）

図８：茶道部の外部講師の先生によるお茶立ての作法指導

4. 今後の展望

(1) 留学生との交流

今年度は上記の実践事例以外にも、碧海野祭の校内発表に留学生の皆さんをご招待し、高校生が案内役となり留学生の皆さんにクラス企画を紹介する機会を設けた。この時は、高校生の案内役希望者が想定より多く、一部の生徒の申し出を断らざるを得ない状況になってしまった。このように活動毎に留学生と高校生の参加者数の調整が必要ではあるが、双方ともに参加希望者は増加傾向にある。次年度以降もこの交流活動を継続し、教育大学の附属高校である本校の特性を活かした活動として定着させていきたい。

以下は交流活動に参加した留学生・高校生が記した感想の一部である。

【留学生】
〇書道体験の感想
I enjoyed this calligraphy experience. It was my first time trying Japanese calligraphy. I think it is difficult to do it, but my pair helped me and it was very nice.
〇教員研修留学生の感想
I enjoyed sharing information about education system in my country and learned about the education system in Japan. I think it would be much more interesting if it involved a larger number of student in the group.
〇碧海野祭の感想
今回、見学させていただいたことをモンゴルの高校生や大学の学生たちに紹介したと思いました。

【高校生】
〇書道体験の感想
よく行く中国でも、まだまだ知らない所や、日本とは異なる文化を知れて楽しかった。
〇教員研修留学生との交流会の感想
2 人の先生が教育システムを話してくれたプレゼンテーションの内容が、あんまり理解できなかったので、リスニング頑張ろうと思った。
〇碧海野祭の感想
多くのクラスでは脱出ゲームやクイズなどを実施していたために、ルールを英語で表現するのが難しかった。
相づちを打ち、文を簡単にしてはっきりさせると、コミュニケーションが上手くいくし、話していて楽しい気持ちになると思いました。伝えようとする気持ちが大切だと感じました。

留学生の皆さんの感想からは、交流活動が日本の高校生と接する貴重な体験の場となっており、好意的にとらえてもらっていることが読み取れる。実際に全ての活動に参加してくれている方もいる。また、高校生の感想からは、ただ楽しいだけでなく語学学習への意欲が高まる契機ともなっていることがわかった。この他、高校生の意見として「スマホで記念写真を撮らせてほしい」というものもあったが、これは本校の校則上、認められないものである。しかし、記念写真を撮りたいと思えるということは、それだけ留学生との交流に興味を持っていることの表れとも言え、交流会の最後には別れを惜しむ姿を見ることもできた。

(2) 国際交流活動全般
新たに始めた愛知教育大学の留学生との交流活動は、次年度以降も国際交流活動の柱として継続していく意義は十分にあると感じている。また、その一方で豪州語学研修に興味を持っていた新入生が少なからずいたのも事実である。このような生徒たちのためにも昨年度までのような海外での研修の機会を生徒たちに提供していく方法も検討中である。本校が単独でこのような機会を提供するのは難しいため、現在、校務部会では仲介業者を通す方法、あるいはユネスコスクールのネットワークや愛知教育大学のリソースを活用した方法について、検討を進めている段階である。
また本校が位置する刈谷市、周辺の知立市や豊田市には外国出身の方々も多く住んでおられ、この地域の小・中学校には日本語支援を必要としている児童・生徒も通っている。昨今、地域に開かれた学校

作りが求められているが、そのような学校作りに向けて本校生徒と地域の児童・生徒が交流する機会を設けるのも一つの方法ではないかと感じている。

5. おわりに

今年度の交流活動は愛知教育大学の小塚良孝先生、三浦秀樹氏のご理解・ご協力により無事終えることができました。まず、活動の場を与えてくださったお二人に感謝申し上げます。また、活動に興味を持ち、積極的に参加してくださった留学生の皆さんと高校生諸君にも感謝致します。最後になりますが、英語科や部顧問の先生方をはじめ、ご協力をいただいた先生方、ありがとうございました。